
山川玲花の怪奇事件簿

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山川玲花の怪奇事件簿

【Nコード】

N8356L

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

山川玲花は霊感が強く、子供のころから他人には見えないもの、いわゆる幽霊の類を見て感じる事ができた。

幸いなことに彼女の家族や友人たちは理解ある人間ばかりで、その能力は気味悪がれるどころか、むしろお手軽な幽霊探知機みたいな扱いで、重宝されていた。

山川玲花は靈感が強く、子供のころから他人には見えないもの、いわゆる幽霊の類を見て感じる事ができた。

幸いなことに彼女の家族や友人たちは理解ある人間ばかりで、その能力は気味悪がれるどころか、むしろお手軽な幽霊探知機みたいな扱いで、重宝されていた。

時は流れ、玲花は大学生になった。大学は東京にあるため、故郷の九州を出て、一人暮らしを始めた。さすがに大都会だけあって、東京は様々な憎悪・悪霊に満ちあふれていたが、成長した玲花は、それらに対処するすべも身に着けていたので、問題なく暮らしていた。

大学の夏休み。玲花は故郷の九州に帰省した。都会を離れのんびり過ごしていると、玲花が返ってきたことを知った母の姉——叔母から連絡があった。

幽霊の類の件で、相談したいことがある、と。

辺り一面に広がる田畑。はるか遠くになだらかな山肌が見える。風になびく稲穂を、助手席の窓から眺めつつ、玲花は都会とは違った田舎の良さを感じていた。

「へえ。あのアパート、もう出来ていたんだ」

「そうなんよ。幸い入居者も全員埋まって、万々歳ってところやっただけだなあ」

車を運転する叔母が、前を見ながら答えた。

玲花の実家から離れたところに住む叔母は、実は大地主である。この先一帯の田畑は、ほとんどが叔母名義と聞く。もっとも広いばかりで、手入れもされていないような荒れ地がほとんどだ。それではもったいないと、叔母はついこの間、その一角に賃貸アパートを

建設したのだ。

叔母は車を止めた。

「ここなんやけど、どう？」

なだらかな畑の一角、小さな道路に面したところに、荒れた畑と是不釣り合いなモダンな雰囲気、クリーム色をした建物が見えた。2階建て、部屋の数6部屋。ごく普通のアパートである。ただ、周りが周りだけにすごく浮いているというか、違和感を受ける。

「……こんなところに、入居者が集まるの？」

「馬鹿にしちゃあかん。それでも全部屋、埋まっとったんよ」

「なるほど。それは確かにミステリーねっ」

「ちゃうって」

叔母の突っ込みを軽く受け流して、玲花は車から降りた。東京と違って、やはり空気がおいしい。玲花はなびく髪を手で押さえた。車に乗っているときも感じていたが風が心地よい……

「——っ」

なんて気持ちは、数歩歩いただけで、あっさりと吹き飛んでしまった。

「入居が始まって一カ月たないくらいやったな。入居者が次々と契約を解除してアパートを出て行くんよ。わけを聞くと、どうやら心霊現象が起こっているらしいんだわ。地震でもないのに物が動くとか、毎晩奇妙な夢を見るとか、女の声がするとか……」

玲花の様子に気づかず、叔母はすらすらと述べる。

「実はアパートを造る工事の際にも、そうゆうのが色々あったらしいんだわ。もしかすると、それが原因でアパート自体が欠陥住宅やったんかな？ で、入居たちが知らずにストレスを感じていたってことは、ないかの？」

「いや……これ、本物だよ……」

アパートに踏み入ろうとして、玲花は身じろぎをした。強烈な怨念、怒りを感じる。これなら霊感のない人にも影響が出る。今は平然としている叔母だって、アパートの元住民と同じく、この建物に

数日暮らせば、体調に異変をきざすだろう。

玲花はアパートに入ることをあきらめて、その場で瞳を閉じ、霊の正体を感じ取るうとした。

「……見える。髪の毛の長い女性。顔はひどい事になっていて年齢はよくわからない。うーん。顔だけじゃない。足とか手にも、あざのような模様のようなものがたくさん。髪もすごく乱れている。着ている服も、見たことのないような状態に」

さすがの叔母も恐怖を感じたのか、袖から顔を出す両腕を抑えた。「怖いわあ。それって殺人事件かの。その人がこの下に埋まっとるんか？」

「かもしれないね。そういう噂、なかったの」

「ないなー。こんな田舎で殺人事件などあったら、噂にならんはずがないわ」

そう叔母は言うが、玲花は半信半疑だった。

殺人事件というのは、死体が見つかったから発覚するものであって、人知れず埋まっているのなら、まだ行方不明者。事件が明るみに出ていないだけかもしれない。それとも、どこか遠くで殺して、車でここまで運んできて埋めたのかもしれない。

「……それにしても、よく畑作業していて平気だったね」

「そりゃまあ。野良仕事をなめたらあかんよ。まあこの辺はほとんど放置しっぱなしやったけど」

「ただ、今は一般の人でも影響を受けちゃうくらいだもん。このアパート、そのままにしておいちゃ、駄目だよ。自分の上に建物を作られて、この霊、かなり怒っているみたい」

叔母はしばらくうなって、答えた。

「うーん。考えとくわ」

玲花が東京に戻って数日後。母から電話があって、叔母がアパートを取り壊すことを決めたとの連絡があった。

「へー、そんなことがあったんだ」

夏休みが明け、大学が再開した玲花は、久しぶりに会った友人たちと構内のカフェテリアで近況報告をしていた。

「けどさあ、結局その女のひとつて、何だったの？」

「……さあ？ まだ、聞いてないけど」

玲花が答える。

「けれ普通、アパート建てるときに地面を掘るよね？ なんて見つかなかったの？」

「アパートができてから、入居者の一人がその女の人を殺して埋めたのでは？」

「それとも、ちょっと掘ったくらいじゃ見つからないほど、古い時代の人だったんじゃないの？」

なんて友人たちは笑っていた。

そのとき、玲花の携帯が鳴った。叔母からだった。

「なんか、卑弥呼の墓が見つかった」

（後書き）

玲花の見た、ひどい状態というのは、鬼道の最中の卑弥呼ということとです。

私のイメージは、体中に紋様を描いて狂ったように髪を振り乱す……って感じだったので。

納得いかなかったらごめんなさい。

あと近畿説を主張する方、すみません。

九州の方、九州弁じゃなくてすみません（九州に住む従妹の口調を真似てみました）。

ちなみに、私は鯨統一郎著『邪馬台国はどこですか？』の八幡平説が好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8356/>

山川玲花の怪奇事件簿

2010年10月8日14時46分発行